

|         |                               |         |                            |           |
|---------|-------------------------------|---------|----------------------------|-----------|
| 氏名(本籍)  | おお た なお たか<br>太 田 尚 孝 (愛 知 県) |         |                            |           |
| 学位の種類   | 博 士 (工 学)                     |         |                            |           |
| 学位記番号   | 博 甲 第 5540 号                  |         |                            |           |
| 学位授与年月日 | 平成 22 年 7 月 23 日              |         |                            |           |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当              |         |                            |           |
| 審査研究科   | システム情報工学研究科                   |         |                            |           |
| 学位論文題目  | 再統一後のベルリンにおける都心改造に関する研究       |         |                            |           |
| 主       | 査                             | 筑波大学教授  | 博士(工学)                     | 藤 川 昌 樹   |
| 副       | 査                             | 筑波大学教授  | 工学博士                       | 大 村 謙 二 郎 |
| 副       | 査                             | 筑波大学教授  | 工学博士                       | 糸井川 栄 一   |
| 副       | 査                             | 筑波大学准教授 | Ph. D. in Regional Science | 有 田 智 一   |
| 副       | 査                             | 筑波大学講師  | 博士(工学)                     | 藤 井 さ や か |

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は世界的にみても類例を見ない数奇な都市形成の歴史をたどったベルリンを研究対象として取り上げ、とりわけ都心のあり方を巡って激しい議論が交わされた再統一後のベルリンの都心改造に焦点を絞って、その計画論、手法の特徴と課題を解明することを目的としている。

本研究は、3部(第1章から第5章)構成で、序章及び終章を含めて全7章からなっている。

序章の研究背景と目的の記述を受けた第1部はベルリンの都心改造の歴史的系譜を明らかにする部分で、2章よりなっている。第1章では戦前のベルリンの都心改造を代表的なプロジェクトやプランナーに即して歴史的に振り返り、時代ごとの都心改造の社会的背景と特色を明らかにしている。具体的には、①ドイツ帝国時代の都心改造はベルリンへの機能集中によって実現されたが、これは新旧都心(東西都心)の発展差異を視覚的に示すようになったこと、②ワイマール時代やナチス時代の都心改造は大きな社会的な変動と比較してあまり進まなかったこと、の2点を明らかにしている。

第2章では東西ドイツ時代のベルリンの都心改造を東西の比較的視点から歴史的に整理することで、東西分断期の特徴を明らかにしている。具体的には、①東西ドイツ時代の都心改造は政治的状况に大きく左右され、両陣営の優位性を示すための顕示的な都心改造が行われたこと、②東西どちらでも都市計画的なパラダイムシフトが1970年代からみられたが、その背景や現象は東西で異なっていたこと、③ベルリンの壁の建設により東西ドイツ時代に都心が東西分離する形で発展、形成が見られたこと、の3点を明らかにしている。

第2部は再統一後のベルリンの構造転換と都心改造マスタープラン(MP)の策定を扱った部分で第3章では、ベルリンの壁崩壊から1990年代前半のベルリンの都心改造論に関わる動向を整理し、その後の「都心改造MP」策定に関わる社会的背景を明らかにしている。具体的には、①ベルリンの壁の崩壊直後には楽観的な成長予測が大勢を占め、過剰な不動産開発が行われた結果、1993年・1994年を境に開発バブルが崩壊し、都市開発の潮流が郊外への拡大路線から都心回帰へ大きく変化したこと、②ボンからの遷都決議により再統一後のベルリンの都心改造には国家・ベルリン市・行政区・民間事業者・市民社会などアクターが多様化したこと、③1990年代前半のベルリン市の都心改造論は、都市環状鉄道網をベースにした多心型と歴

史的な市街地への回帰という二つの計画論が示されていたこと、の3点を明らかにしている。

第4章では再統一後のベルリンにおける「都心改造MP」の策定プロセスを追い、再統一後の都心改造がどのような主体間の議論の中で構築されたのかを明らかにしている。具体的には、①「都心改造MP」はベルリン市都市開発省の事務次官であり、かつ反モダニズムのハンス・シュティマンを中心にごく少数のアクターによって準備され、プランニングされたこと、②「都心改造MP」の策定に対しては激しい抵抗や批判が繰り返されたが、社会主義的なストックは維持する対象にはなりえなかったこと、の2点を明らかにしている。

第3部は事例調査を扱った第5章である。東側の都心部（ケルン・ベルリン一帯）で行われている都市開発プロジェクトにおいて、前時代のストックがどのように扱われ、どのような課題が生じているかを論じている。扱っているプロジェクトはベルリン王宮(国家と都市の中心点の模索)、アレキサンダー広場(デベロッパ型都市計画の功罪)、フリードリヒス・ヴェルダ地区(「都心改造MP」の実現モデル)、シュパンダウアー・フォアシュタット(「アーバニティ」と歴史的ストックの再解釈)である。結果として、①前提条件の違いや計画主体により社会主義時代のストックの扱いがプロジェクトごとで大きく異なること、②「都心改造MP」の実現可能性は現時点では極めて限定的であること、の2点を示している。

最終章では本研究のまとめを行っている。再統一後のベルリンにおける都心改造の特徴として、①ベルリンの都心改造は、大局的にみれば20世紀の都市計画が直面した課題と対応策の変遷を反映しており、ヨーロッパの都市の中では珍しく、常に動的で絶えず変化を繰り返すベルリンでは、革新的・先端的都市計画課題が現れ、多様な試みがなされており、これが、ベルリンの都市形成の歴史的なユニークさを特色づけていること、②多様なアクターの存在がゆえに、総論として社会主義ストックが否定されるとしてもその否定の仕方が異なり、戦前の都市像への回帰という共通性があったが、個別プロジェクトで公共介入、民間関与の度合いが異なっていること、③シュティマンという独特なキャラクターを持ったカリスマ的プランナーの存在がベルリンの都心改造に大きく関与した点である。ドイツでは議会や政治的意思決定者がプランナーの能力や権能に信頼を寄せ、政治的権力の変動と独立に、長期間その人物に都市計画の策定、専門的権限を付託することになっていることのベルリン的現われといえる、の3点を指摘している。

さらに、本研究から導き出された今後のベルリンの都心改造の課題として次の2点を示している。

①都心改造は、どの時代でもある種のイデオロギーに満ちた行為であることは間違いないが、社会主義的なストックの単純な否定を目指す都心改造で社会主義時代の旧東ベルリンの存在価値を全否定するのではなく、より現実的に過去のストックを内部に取り込み、都市の一部として共存の形を歩むことが必要であること、②社会的な配慮がないままに都心回帰という都市経営的な視点のみで都心改造が行われることの危険性で、急激なジェントリフィケーションを抑制し、どのように社会的な公平性を保ちながら都心改造を行っていくことの2つである。

## 審査の結果の要旨

本研究は、ベルリンの都市形成の歴史を踏まえつつも、特に東西ドイツ再統一後のベルリンの都心改造の経緯、計画論の特色、都心改造プロジェクトの実態解明などを総合的、体系的に明らかにした研究として高く評価できる。特に次の点が本研究の大きな貢献といえる。

A：精力的に関連文献、一次資料を博搜し、また多数のベルリン都市改造関係者にヒヤリングを行い、ベルリン都市改造の計画論、プロジェクト論を見通しよく整理した点である。従来、わが国では断片的に紹介されるだけだったベルリンの都市改造の計画、実態を体系的、総合的に示した点である。また、ドイツでもこのような形のまとまった研究は類似例が少ない点も本研究の大きな貢献といえる。

B：再統一後のベルリンの都市改造計画論をリードした人物であるシュティマンに着目し、直接のインタビューを行うとともに、関係者へのヒヤリング、関連行政資料を整理することによって、キーパーソンに着目した現在進行形の「都心改造 MP」の計画論的特色、意義、問題点を整理した点も本研究のオリジナルな貢献として高く評価できる。

C：再統一後のベルリンの都心改造という、現在進行形の錯綜した計画、プロジェクトを、歴史的な文脈の中で位置づけ、その特色、構造を一定程度解明したことも大きな貢献である。

ベルリンの都心改造を現代ドイツの都市計画の中でどのように位置づけるか、現代の先進諸国の大都市の都市計画、都心改造にとってどのような示唆する点があるかについてはまだ詰め切れていない点もあるが、本研究は今後の研究課題としてその見通しも提示しており、全体として学術的な独創性、社会的な有用性を兼ね備えた研究であり、学位論文として十分な内容をもつものと判定する。

よって、著者は博士（工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。